

茨城県・私立大成女子高校

キャリア教育

# 学校設定教科を通して 生徒のキャリア設計を支援、 主体的な進路意識を醸成

## 変革のステップ

### 背景と課題

- 創立100周年を機に、生徒の進路意識の向上を目指して、普通科における指導改善に着手

### 実践内容

- **キャリア教育と部活動の両立** 2010年度、放課後に実施していた進路プログラムを、正課に組み込み、部活動と両立しやすい環境を整えた
- **「総合的な学習の時間」の刷新** 10年度、社会で必要なスキルの育成を目指し、企業や各種団体と連携した体験活動などを「総合的な学習の時間」に導入
- **学校設定教科「キャリアデザイン科」の設置** 16年度、学校設定教科「キャリアデザイン科」を設置。地域と連携しながら、アクティブ・ラーニングを取り入れた探究活動を充実させ、進路意識の向上と、希望進路先で求められる専門スキルの育成を図る

### 成果と展望

- 「キャリアデザイン科」への教師の意識が高まり、積極的に取り組みのアイデアが出るようになった
- 生徒のコミュニケーション能力や進路意識が向上

## PROFILE



校訓として、「誠実・協和・勤勉」を掲げる。普通科・家政科・看護科があり、看護科では、看護科3年・専攻科看護科2年を合わせた5年一貫教育を行う。部活動も盛んで、吹奏楽部やバレーボール部などが、県代表として上位大会に出場している。

設立 1909(明治42)年

形態 全日制/普通科・家政科・看護科(5年制)/女子校

生徒数 1学年約230人

2017年度進路実績(現浪計) 国公立大は、釧路公立大、筑波大に2人が合格。私立大は、駒澤大、日本大、立教大などに延べ39人が合格。短大、専門学校進学69人。就職20人。

住所 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町3-2-61

電話 029-221-4888

Web site <http://www.taisei.ac.jp/jp/tghs/>

## キャリア教育と部活動の両立を目指し、第1期の改革に着手

茨城県・私立大成女子高校は、「社会に役立つ女性の育成」を目指して創設された、茨城県内で最も長い歴史を持つ私立高校だ。2009年に創立100周年を迎えたのを機に、普通科の指導改善に着手し、段階的に推進している。

改革元年である10年度には、2つの取り組みを始めた。1つは、キャリア教育と部活動を両立させやすい環境の整備だ。当時の普通科では、特進コースと進学コースを設けていた。特進コースでは、様々な進路プログラムを通して進路意識の向上を図り、推薦・AO入試を中心に進学実績を上げていたが、プログラムの多くが

放課後に行われていたため、特進コースの生徒は部活動に遅れて参加せざるを得なかった。一方、進学コースでは、キャリア教育をより充実させたいという思いがあった。そこで、コース制を廃止し、進路プログラムを、各教科・科目の授業や「総合的な学習の時間」といった正課に組み込んだ。例えば、外部講師を招いて行っていた特別講義は、各教科・科目の担当教師が、生徒の実態に合わせて講師を選び、年1回、自分の授業に招くことにした。この取り組みは、コース制に戻った現在も、特別授業「コロキウム」となり継続している。

もう1つの取り組みは、「総合的な学習の時

茨城県・私立大成女子高校教頭

**寺門恵子** たらかど・けいこ

教職歴35年。同校に赴任して36年目。「他から学ぼうとする姿勢を常に忘れずにいたい」

茨城県・私立大成女子高校

**糸川明子** いとかわ・あきこ

教職歴27年。同校に赴任して28年目。入試広報部副部長。「生徒たちの長所はもちろん、短所も生かせるような指導を目指している」

茨城県・私立大成女子高校

**森 聖子** もり・せいこ

教職歴25年。同校に赴任して22年目。学習指導部部長。「何事も全力を尽くし、学ぶことをともに楽しみ、未知に挑戦する」

茨城県・私立大成女子高校

**鈴木博之** すずき・ひろゆき

教職歴22年。同校に赴任して22年目。教務部副部長。「生徒一人ひとりが自己肯定感を持てる場面をつくりたい」



間」の内容の刷新だ。地域や社会とのつながりを深め、卒業後に必要な教養やスキルの育成に力を注げるよう、「ベイスス」というプログラム学習を導入した。1年次には「女性としての私」、2年次には「国際社会と私」、3年次には「社会で活躍する私」というテーマを設定。NPOやNGO、地域の企業・団体などと連携しながら、新聞の活用法や金銭教育、企業見学、海外からの留学生との交流などを進めた。そして、この「ベイスス」、前述の「コロキウム」、大学の学部・学科などの進路情報の提供や調べ学習を行う「進路ガイダンス」を、「大成キャリアデザインプログラム」の3本柱と位置づけた。

寺門恵子教頭は、こうした第1期の改革の成果を次のように振り返る。

「部活動も勉強も頑張りたいという、意欲的な入学者が増えました。単に進学実績を追うだけでなく、一人ひとりの生徒が、卒業後の進路をしっかり考えながら、部活動にも打ち込んでいく姿が、地域に受け入れられたためだと捉えています」

**学校設定教科を新設し、生徒のキャリアの主体的な設計を支援**

「ベイスス」は、生徒の視野を広げ、社会へのイメージを豊かにする半面、課題もあったと、学習指導部部長の森聖子先生は振り返る。

「体験活動などによって生徒が大きな刺激を受けたことは、事後のレポートなどからう

かがえましたが、それを全員が実際の進路選択や学習意欲に結びつけられているわけではありませんでした。与えられた活動だけではどうしても受け身になり、一時的な感動に終わってしまうことも多いと感じました」

そこで、「ベイスス」は15年度入学生（現3年生）の卒業とともに終了することにした。そして、生徒自身が主体的に参加し、深く考える場を設けるとともに、地域貢献や女性の生き方という視点をさらに強化したいという思いの下、次なる改革へと踏み出した。

第2期の改革は、16年度以降の入学生を対象とする学校設定教科「キャリアデザイン科」を新設して本格化した。これは、3年間を通して、女性としてのライフサイクルの追究や、キャリアの主体的な設計・実現を目指し、地域と連携した取り組みを行う教科だ。準備は15年度に始め、森先生や、入試広報部副部長の糸川明子先生、教務部副部長の鈴木博之先生ら、第1期から改革に携わってきた教師に、「ベイスス」の担当者らを交えた計10人で、取り組み内容の詳細や教材などを選定し、具体化させていった。プログラムは、次の通りだ（P.32図1）。

1年次の「キャリアデザインI・A」では、キャリア設計の考え方や方法を学んでいく。職業や自分の生き方、課題の発見と解決方法を考えたり、社会で活躍する女性と直接話をする場を設けたりと、その内容は多彩だ。3学期には、2日間のインターンシップを行い、「働くとはど

図1 「キャリアデザイン科」のプログラム	
1年次 「キャリアデザインI・A」	
概要	4～5人のグループワークを中心に、課題発見・解決力の育成、自己管理の習慣化、職業理解の深化、キャリア形成などを図る。
主な取り組み	<ul style="list-style-type: none"> <li>手帳によるスケジューリング (PDCAの習慣化)</li> <li>インターンシップ (2日間)</li> <li>職業や自分の生き方などを考えるプログラム など</li> </ul>
2・3年次 「キャリアデザインII・B」	
概要	探究学習を通して、主体的・対話的で深い学びを実現。
主な取り組み	<b>保育・幼児教育フィールド</b> 監修者◎茨城女子短期大学保育科 <ul style="list-style-type: none"> <li>幼稚園・保育園での定期的な体験実習</li> <li>幼児安全法講習 など</li> </ul>
	<b>看護・医療フィールド</b> 監修者◎同校看護科 <ul style="list-style-type: none"> <li>病院での体験学習</li> <li>医療職ガイダンス など</li> </ul>
	<b>ホスピタリティフィールド</b> 監修者◎茨城大学人文社会科学部の小原規宏 <small>おぼらのひろ</small> 准教授 <ul style="list-style-type: none"> <li>ホテルや高齢者施設などでの体験学習</li> <li>インターンシップ など</li> </ul>
	<b>アート表現フィールド</b> 監修者◎専門学校 文化デザイナー学院 <ul style="list-style-type: none"> <li>デザイン・イラストの基本実習</li> <li>コンピューターグラフィックスの実習 など</li> </ul>
	<b>地域デザインフィールド</b> 監修者◎一般社団法人 i.club <ul style="list-style-type: none"> <li>地域の魅力を再発見するフィールドワーク</li> <li>地域の産品を使った新商品の開発 など</li> </ul>

\*学校資料を基に編集部で作成

「目標から逆算して計画を立てる力は、大

「目標から逆算して計画を立てる力は、大  
 学入試だけでなく、社会に出てからも必要と  
 なります。今後は、『Classi』(※1)のスケ  
 ジュール機能を活用し、学習時間や成績をグ  
 っと伸ばす。鈴木先生は、こう述べる。

「目標から逆算して計画を立てる力は、大  
 学入試だけでなく、社会に出てからも必要と  
 なります。今後は、『Classi』(※1)のスケ  
 ジュール機能を活用し、学習時間や成績をグ

ラフ化することを検討中です。自分の計画が  
 視覚的に捉えやすくなれば、生徒へのさらな  
 る意識づけにつながると考えています」

## 2年次以降は、将来を見据えて 専門性の向上を図る

2・3年次の「キャリアデザインII・B」では、  
 「保育・幼児教育」「看護・医療」「ホスピタリ  
 ティ」「アート表現」「地域デザイン」という5  
 つのフィールドから、生徒が自分の興味や志望  
 に基づいて1つを選び、探究学習に取り組む。  
 選択理由が曖昧な生徒には、各フィールドの担  
 当教師が面談を行い、生徒の興味や将来の目標

などがフィールドの趣旨と本当に合致している  
 かどうかを探り、ふさわしいフィールドが別  
 あると思われる場合には、再考を促す。

「同じフィールドを希望している生徒でも、  
 『人のために尽くしたい』『自分の力を試した  
 い』といった、やりたいことの本質的な部分  
 では志向が異なります。適切なフィールドを  
 選択できるように、面談で生徒の内面を掘り下  
 げていきます」(鈴木先生)

「キャリアデザイン科」の新設時には、専門  
 性が高くなる2・3年次の取り組みをいかに充  
 実させるかが、最大の課題となった。そこで、  
 各フィールドの専門家や機関に内容の監修を依  
 頼し、講座や実習などでも連携を図ってもら  
 うことにした。例えば、観光や福祉といった、人  
 と接する職業の志望者に向けた「ホスピタリ  
 ティ」では、茨城大学人文社会科学部の小原規  
 宏おぼらのひろ准教授の監修により、観光やホスピタリ  
 ティとは何かを学ぶ。さらに、水戸市の観光PRを  
 担う「水戸の梅大使」の経験者から、笑顔や挨拶  
 を始めとする「おもてなし」に必要なスキル  
 を学び、それを、借楽園の園内ガイドのボラン  
 ティア活動で実践する。また、自らが地域をデ  
 ザインする人材になることを目指す「地域デザ  
 イン」では、商品開発などを通して学校と地域  
 を結ぶ活動を行う一般社団法人「i.club」の監  
 修により、県内の産品を用いた新商品の開発に  
 挑戦する。このフィールドを設置する準備とし  
 て、15年度から2年間、森先生を顧問とする「探

\*1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合併会社であるClassi 株式会社 が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。

図2

「キャリアデザインⅡ・B」の振り返り(例)

学習報告書		出欠の記号 出席:○ 欠席:△ 公文:△ 遅刻:× 早退:△	
授業日	5月9日(火) 56	時間目	出欠
担当先生	所属 日本おもてなしトレーナー協会	所属	
	お名前 先生	お名前	先生
学習した内容	具体的な内容		
<ul style="list-style-type: none"> <li>第一印象が良くなるには?</li> <li>第一印象が良い人はどんな人?</li> <li>逆に悪い人はどんな人?</li> </ul>	転校生役と、聞く方は分かる、自分がどんな気持ちになるか比べ、社会に出ての時は、第一印象を良くする方法を学んだ。		

各フィールドで、活動ごとに「学習報告書」を作成し、学習内容を振り返るとともに、よかった点や改善点、自己評価、次回の目標などを言語化する。

\*同校の資料を一部抜粋して掲載

究部」という部活動を設け、JCMの協力の下、地元企業と協働で、干し芋を用いた「ほしいもグラノーラ」の開発・販売を実現させた。

『地域デザイン』は、教師・生徒両方にとって難易度の高い取り組みなので、まずは部活動として始めてみて、プロセスを検証してから授業を始めたいと考えました。試行錯誤

の連続でしたが、地元企業との交流から、地域には『子どものために何かをしたい』という方が想像以上に多いと気づき、地域と協働する大切さを改めて感じました(森先生)

16年度入学生(現2年生)は、1学期に、商品開発やアイデアの発想法を学んだ後、「ほしいもグラノーラ」の新風味を試作し、協働する企業に自分たちのアイデアを提案した。2学期以降は、独自の新商品の開発・販売を目指す。

### 言語化を通して学びを深め、主体的に行動し始める生徒たち

「キャリアデザイン科」では、1・2年次を通して、アクティブ・ラーニングにも力を入れている。1年次では4〜5人のグループワークを中心とし、生徒が主体的に役割分担を決めて、活動に取り組む。そうした中で、自分の考えを的確に表現する力が養われていくという。2年次では、取り組みで得た気づきや学びを言語化する機会を定期的に設けており、その1つである書くことによる振り返りは、全フィールドで取り入れている(図2)。また、フィールドごとの工夫も見られる。例えば、「ホスピタリティ」では、他者への理解を深められるよう、認知症サポーターによる講習を設けているが、その振り返りとして、「自分たちの経営する美容室に、認知症の患者が家族につき添われて来店した」という設定の寸劇を、グループごとに行った。糸川先生は、次のように語る。

「生徒自身が配役やストーリーを決めて演じることにより、『決して患者を怒ってはいけない』といった、講習で身につけた知識を深い理解につなげられると考えました。『ホスピタリティ』では、こうした寸劇やプレゼンテーションをよく行いますが、回を重ねるごとに、生徒はどんどん主体性を増して積極的に行動できるようになります」

### 「キャリアデザイン科」の成果を、大学進学実績につなげていきたい

同校の指導改善は、「キャリアデザイン科」に結実しつつある。「キャリアデザイン科」への教師の意識も高まり、会議などで積極的に取り組みのアイデアが出るようになった。今後は、より多くの教師が「キャリアデザイン科」の授業を行えるよう、授業公開なども積極的に進めていく予定だ。また、生徒は「キャリアデザイン科」での活動を通して、自分の考えを具体的に伝えられるようになり、進路選択に際しても、自分の志望を順序立てて明言できるようになった。このような成果を、大学進学実績につなげていくことも、今後の目標の1つだ。

『キャリアデザイン科』で構築したアクティブ・ラーニングの指導ノウハウが、各教科・科目に浸透すれば、全校体制での指導改善はより充実するでしょう。今後も、生徒の姿や指導の効果を先生方と共有しながら、取り組んでいきたいと考えています(森先生)